

お姉さんのいけない誘惑～若い欲棒の快樂～

直輝／NAOKI

第一章

「ふ.....あん.....」

香織はクリトリスを右手の中指で刺激しながら、左手に綿棒を持ってアナルを刺激していた。中学校三年以来続けてきた香織の自慰行為が、その夜も始まったのだ。

ひとしきり、指と綿棒で自らの性器とアナルを苛めたあと、香織は起き上がって、ベッドの下からピンク色をしたバイブを取り出した。

足を開くと、焦らすようにそれでしばらく自分の性器を撫でた。頭のなかで、ついさっき読んだレディースコミックに出てきた陵辱される女主人公と自分の痴態をオーバーラップさせた。

ああ、私もこんなふうに男から扱われたい.....。

そそり立った太いペニスで、私を目茶苦茶に貫いて欲しい.....。

性感を我慢できないくらい昂進させると、手のひらにたっぷりローションを取って、ペニスを扱くように手のひらで包み込んで愛用のバイブに塗りつけた。湿っぽいやらしい音が部屋中に響いた。

ローションを少し足して、ドキドキしながら太いバイブを膣のなかに、ずぼり、と突っ込んだ。

「あっ、ああっ……！」

香織は鋭い快感に思わず仰け反った。太いバイブが膣壁を押し広げながら奥まですんなり入ってきた。一番太い部分が膣の狭い部分を通過すると、あとは勝手に飲み込まれるように奥に入ってしまった。わざと音が出るように抜き差しすると、あまりの快感に頭が熱くなってきた。

「ああ……最高……気持ちいい……」

香織は焦らすようにわざとゆっくりバイブを動かした。途中まで抜いて、再び挿入する動作を繰り返した。膣の中が引っ張り出される感じがたまらなく快感であった。

「ああ……いい……」

抜くときの快感に耐え切れず、香織は声を漏らした。

「んふう……ううう……」

動かし続けている間じゅう、強烈な快感がずっと持続した。

細かく震わせたり円を描くようにして、時折、空いている手の指でアナルをこねくり回したりした。

「ああ.....来るっ.....来ちゃうっ」

ツーンツーンとする快樂の波が全身に広がってきて、膣とアナルの中がじわっと熱くなってきた。

腰が火照ってくるような感覚に襲われ、やがてその感覚が次第に全身に広がっていった。

「んう.....ああっ！ イク.....」

絶頂に達しようと、香織は右手でバイブを動かしながら左手の指でクリトリスを激しく擦った。瞬間、ぶわあと体が空に浮かんで行くよう感じに襲われた。

「ああ.....イクッ！ イクウ！」

そのまま身体がガクガクと痙攣して頭の中が真っ白になった。

いった直後はクリトリスも膣の中も敏感になり過ぎていたが、連続でもう一度すぐにイケそうな気がして、香織は激しくバイブをピストンさせた。いきながら動かし続けると、その間も軽い絶頂感が何度も何度も押し寄せてきた。

「あああっ.....はっ、はっ、ああうっ！」

腰が引けそうになるくらいの鋭い快感を我慢していると、ようやく待ち望んでいた最後の波がやってきた。

「ああああああ！ また.....またいっちゃうううう！ ああああああっ！」

香織はふたたび一気に昇りつめた。さっきよりも勢い良く快感が全身を突き抜け、全身が痙攣した。そして、その後、体中の筋肉が急速に弛緩していった。

「はあ.....よかったあ.....」

身体ががっくりと力が抜けるまで責め続けて、ようやく香織のオナニーが終了した。

「ああ.....セックス.....したいな.....」

秘部から抜かれたバイブは妖しい女の匂いを放っていた。

「ああ.....疲れた.....」

香織は二十六歳。看護婦になって五年。今のマンションの三階に移ってきて一年になる。

香織は近くの個人病院に勤めていた。個人病院といっても入院施設もある総合病院だが、かといって救急指定されるような大病院でもない。夜勤もあったが、病気の急変に神経をすり減らさなくてはならないような患者もおらず、わりとのんびりと出来る病院であった。とはいえ、やはり仕事は疲れる。

オナニーを済ませた香織はそのままバスルームでシャワーを浴びた。自分の淫汁にまみれたバイブを綺麗に洗い、ボディークリームで手早く全身を洗うと、バスタオルで体を拭き、ベッドの上に身体を投げ出した。

リモコンのスイッチを入れ、しばらくぼーっとテレビを見ていたが、激しいオナニーの疲れでやがてウトウトと眠ってしまった。

しばらくして、心地よい風を肌感じて、彼女は目を覚ました。

ベッドに突っ伏したまま薄ら目を開けると、先と変わらない部屋の光景があった。白っぽく

変色した食器棚。ティーセットが入れてある戸棚。戸棚の上には、胡椒や塩などの調味料が、お洒落な籠の中に入れていた。

「もうこんな時間……」

ベッドの脇においてある時計を見て香織は立ち上がった。

時計は十一時を指していた。九月の後半になって、外もひんやりしてきて、少し開けてある窓から心地よい風が入ってきた。

窓を閉めようと窓際に歩み寄った香織は、何気なく向かいのマンションの一階下の窓に目をやった。部屋の窓が全開で、中から灯りが漏れていた。カーテンの端が窓の外で揺れていた。

出勤の朝に時々会う、高校生の将孝の部屋だった。シャイそうだが、ジャニーズ系のなかなかのイケ面である。将孝とは直接言葉を交わしたことはないが、香織はこのハンサムな高校生に興味をもっていた。

「そうか……もうすぐ学校の間試験が始まるのね……」

香織が三階から見下ろすと、開けられた窓の窓際に机が置かれてあった。その向こうに将孝の身体が手に取るように見えた。

「えっ？」

香織は息を吞んで目を凝らし、窓から思わず身を乗り出した。将孝の右の肩が激しく小刻みに動いているのが見えたのだ。

「.....まさか？」

もちろん、思春期真っ盛りの将孝が何をしているのか香織はすぐに理解できた。香織はもう一度じっくり眺めてみた。将孝が体を捻った瞬間、股間から天井にむかってつき上がっているペニスが見えた。

「えっ？ やだ.....あの子.....」

ゴクッ.....

思わず唾を飲んだ。と同時に、香織の股間に妖しい疼きが走った。

香織は男性のオナニーなど見たことはなかった。しかし、嫌悪感を感じなかった。むしろ、香織は男のオナニーには興味津々であった。

香織は向こうから気付かれないように、慌てて部屋の電気を切り、窓の縁に身体を隠して、目を凝らした。

視力のいい香織には、将孝のペニスが手に届きそうなくらい近く感じた。将孝は机の上に置いたグラビア雑誌を見ながらペニスを扱き上げていた。時々将孝が身体をずらすと、将孝の右手が動いているのがよく見えた。瞬きも忘れ、香織は食い入るようにその光景を見つめた。

自分のペニスを握り、上下に動いている将孝の右手、その先からはペニスの先端が見えた。

亀頭は十分発達していて、先からピンク色の顔が出入りしていた。長さも太さもかつて香

織がセックスしてきた男達のサイズを超えているように思えた。亀頭は大きく、窮屈そうに包皮を押し上げていた。その先は先走り液でテラテラと光っていた。

「大きい.....」

グッとペニスを握りしめた将孝の手の動きが急に早まった。次の瞬間、将孝は立ち上がり、腰を突き出すような格好をした。ペニスの先端から精液が勢い良く飛び出すのが香織にははっきり見えた。精液はグラビア雑誌の上に飛び散った。

ビクン、ビクン、ビクン.....。

何度も痙攣を繰り返して精液を吐き出す将孝のペニス。

「ああ.....いっちゃった.....あんな風にしてるんだ.....」

香織は思わずつぶやいてしまった。

香織の通う病院の近くに男子高校があり、通勤の時には、いつも純情そうな高校生と顔をあわすが、あの男の子たちもこんな事をしているんだと思うと、香織の胸は高まった。

グラビア雑誌についた精液を拭いた後、ティッシュでペニスの処理をする将孝の姿を見てから、香織はそっと窓から離れた。

香織は、そっと窓を閉め、静かにベットに横たわり「ふう」とため息をついた。何気なく指をショーツに忍ばせると、自分の股間がふたたび湿っているのに気づいた。

確かめるようにショーツの中に滑らせた右手を秘部にあて、そっと中指を曲げた。

「あっ、ああっ」

中指の先がヌルッと恥穴に飲み込まれた。指をゆっくりと回しながら膣口をクルクルと刺激した。

「ヤダッ、さっきしたばかりなのに.....まだ感じてきちゃった.....」

恥穴は生き物のようにヒクヒクと蠢き、さらなる刺激を求めている。香織はそっと手を上に持ってきて、合わせ目のあたりに恐る恐る指を這わせた。一番敏感な部分にたどり着くと、呻き声をあげた。

「あうっ」

股間から全身に鋭く電流が走り抜け、腰がピクンと跳ね上がった。疼くようにじわじわわき上がってくる快感に勝てず、さらに性感を高めるようにクリトリスを刺激した。ギュッと目を閉じ、快感に身を任せた。その脳裏には先ほど見たばかりの将孝のペニスが映った。

羞恥心が、さらに快感を高めた。

「あっ、あっ.....ねえ、はあはあ、見て.....こんなになっちゃった.....」

目の前に将孝がいて、脚を広げて自分の性器を見つめている場面に妄想しながら、香織はオナニーに耽った。

「ほら、見て.....ココに.....あん.....オチンチンが入るのよ.....ああん.....」

香織は二本の指を、ぐっしょり濡れている恥穴にゆっくり挿入した。

「あっ、あっ、ああ.....入ってくる.....そう、そうよ、そのまま.....そのままきてええっ.....」

淫らな妄想が、香織に激しく指を抜き差しさせた。やがて頭の中が真っ白になり、香織の

恥穴が二本の指をグッと締め上げた。

「イクッ.....いっちゃうううっ.....イツちやうっ！」

身体が反り返り、ビクンビクンと痙攣した。過去の恋人との行為でも味わった事のない様な深い絶頂を香織は感じていた。

（体験版はここまでです。本編を買っていただけると嬉しいです。よろしく願いいたします。）